



Title	ポルトガル語文法学習に活用する繰り上げ構文の体系の提示
Author(s)	坂東, 照啓
Citation	ブラジル研究. 2015, 11, p. 47-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/106545
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ポルトガル語文法学習に活用する

繰り上げ構文の体系の提示

坂東 照啓

0. はじめに

埋め込み文の一部が、母型文での文法機能を帯びているとみなされる統語現象は、下位の埋め込み文（従属節）から上位の母型文（主節）へ格上げされているとみなされ、繰り上げという用語で呼ばれる。

繰り上げとして、これまでよく取り上げられる構文の型は、埋め込み文の主語から母型文の主語への繰り上げ（Subject-to-Subject Raising, S→S Raising）である。さらに、文法関係を重視するような立場からは、埋め込み文の主語から、母型文の目的語への繰り上げ（Subject-to-Object Raising, S→O Raising）も分析記述がなされている。

こうした繰り上げの構文は、英語ではすでに詳細な記述もなされ、さまざまな理論的立場から解釈が提示されてきたが、本研究では、ポルトガル語文法学習者への活用を視野に入れ、ポルトガル語で観察される繰り上げ構文の特徴を記述するとともに、派生文型として体系化を考える。

1. 主語から主語への繰り上げを伴う構文

S→S Raising は、(1)－(3) のような文において観察される。

(1) João parece estar doente.

「ジョアンは病気のようだ」

(2) A moça é evidente ter gostado da dança folclórica.

「その女の子がフォークダンスを好んでいたことは明らかだ」

(3) Rosa é raro sair da casa.

「ローザはめったに家から出ない」

(1)－(3) における、*parece, é evidente, é raro* といった述語は、それぞれ、*João, a moça, Rosa* という文の主語そのものを描写してものではない。(1) において *parece* <見える> の対象は、ジョアウンという個体ではなく、むしろ、「ジョアウンが病気 (の状態) である」ということである。同様に、(2) でも、明らかかなことは、女の子という個体ではなく、「女の子がフォークダンスを好んでいた」ということである。また、(3) でも、珍しいひと (・事物) は、ローザという個体ではなく、「ローザが家から出る」ということである。

(1)－(3) は、統語的に、英語にも見られるような、時制をもたない埋め込み文からの主語が繰り上がっている S→S Raising を伴う構文である¹。しかし、ポルトガル語には、これだけでなく、時制を有する埋め込み文の主語が母型文の主語の位置に繰り上がっている構文も存在する。

(4)a. A professora parece ter um noivo.

「先生は婚約者がいるようだ」

b. A professora parece que tem um noivo. (時制を有する従属節)

(4a) は、非時制従属節からの繰り上げであるが、(4b) の場合、従属節は時制を有しており、時制節からの繰り上げとなっている。

さらに、この繰り上げ要素との人称・数の一致に関して、主節で起こるとは限らないことが観察される。

- (5) As paredes parecia estremecerem.

「壁が揺れているようだった」

- (6) Os pardais parece que andam nas pontinhas dos pés, como as bailarinas. (時制を有する従属節)

「すずめは、バレリーナのように、つま先で歩いているようだ」

(5), (6)では、繰り上がった主語と、主節の動詞ではなく、従属節の動詞が人称・数の一致を継続している²。

つまり、ポルトガル語の S→S Raising では、繰り上がった主語と主節の動詞との間に人称・数の一致が起こるとは限らず、主節の動詞、従属節の動詞と、繰り上がった主語との人称・数の一致については、4通りが考えられる。

- (7) a. Os meninos parecem que estão com sono.

「少年たちは眠いようだ」

- b. *Os meninos parecem que está com sono.

- c. Os meninos parece que estão com sono.

- d. *Os meninos parece que está com sono.

- (8) a. *As estrelas pareciam sorrirem.

「星が微笑んでいるようだった」

- b. As estrelas pareciam sorrir.

- c. As estrelas parecia sorrirem.

- d. *As estrelas parecia sorrir.

(7a-d) は、時制を有する埋め込み文（従属節）からの、(8a-d) は、時制をもたない埋め込み文からの、それぞれ S→S Raising を伴う文である。各文の適格性をまとめると、(9a, b) の表ようになる。(V1=母型文の動詞、V2=埋め込み文の動詞、+conc=繰り上がっている動詞と人称・数の一致がある、-conc=繰り上がっている動詞と人称・数の一致がない)

(9) a. 埋め込み文が非定形

V1	V2	
+CONC	+CONC	(*)
+CONC	-CONC	*
-CONC	+CONC	ok
-CONC	-CONC	*

b. 埋め込み文が定形

V1	V2	
+CONC	+CONC	(*)
+CONC	-CONC	ok
-CONC	+CONC	ok
-CONC	-CONC	*

(9a, b) において、* に () を付しているのは、繰り上がっている主語と、埋め込み文の動詞が離れているような場合に、母型文の動詞と埋め込み文の両方の動詞が一致している例も見られるためである。

- (10) Abelhas e marimbondes, de muitas qualidades e cores ... pareciam que estavam morridos. (Guimarães Rosa, *Corpo de Baile*)

「ミツバチとスズメバチは、多くのの特徴を持っているのだが、死んでいるように見えた」

- (11) As aves aquáticas ... pareciam, nos seus vôos incertos ora vagarosos, ora rápidos folgarem com os primeiros dias da estação dos amores. (Alexandre Herculano, *Eurico, o Presbítero*)

「水鳥たちは、愛の季節の最初の日々に、ゆっくりであったり速かったりする不規則な飛行をして、のんびりとしているように見えた」

(10) の埋め込み文は時制節、(11) の埋め込み文は非時制節で、いずれも、母型文の動詞と埋め込み文の動詞がともに繰り上がっている主語と人称・数の一致をしている。(10), (11) の場合、いずれも、繰り上がっている主語と埋め込み文の動詞が、副詞相当の挿入句の存在によって、離れられた位置にある。

繰り上がっている主語との性・数の一致は、埋め込み文が時制節の場合、この埋め込み文の動詞と必ず一致が起こり、母型文の動詞とは一致が普通は起こらない。これに対し、埋め込み文が非時制節の場合、繰り上がった主語は、母型文か埋め込み文かいずれか一方の動詞と人称・数の一致がなされる。

この違いは、従属節である埋め込み文の母型文に対する従属度が関連してい

ると考えられる。

時制をもたない埋め込み文は、時制に関して母型文に依存している。つまり、主節である母型文の時制に埋め込み文が依存しているということは、埋め込み文の独立度が低く、主節との一体度（融合度）が高い。これに対し、時制を有する埋め込み文は、自身で時制を有することで主節に対して独立度が高く、主節への依存度が低く、自己完結性を備えている。そのため、埋め込み文から主語が繰り上がっても、その主語は埋め込み文（の動詞）との結びつきを保ち続けていて、形態的に明確な一致が保たれるという解釈がなされうる。

2. 主語から目的語への繰り上げを伴う構文

2. 1. 判断を表す動詞+ Nexus-object (主述目的語)

ポルトガル語の場合、英語の *believe* に相当するような思考動詞も、情意・意志を表す動詞も、名詞句+不定詞節を目的語にはとらない³。

(12) **Creio João ser inteligente.*

「私はジョアンは頭が良いと思う」

(13) **Helena quer seu esposo trabalhar muito mais.*

「エレーナは夫がもっと働くことを望んでいる」

しかし、主節に判断を表す動詞がある場合、ポルトガル語では、*S→O Raising* を伴いうる。

(14) *Considero Jorge honesto.*

「私はジョルジェは正直だと思う」

(15) *Julgo-me feliz.*

「私は自分を幸せだと思う」

(14) の場合、*Jorge* は直接目的格代名詞 *o* に置き換えられ、埋め込み文の主語から母型文の目的語位置に繰り上がっていると考えられる。(15) の場合、再帰代名詞 *me* が、埋め込み文の主語から母型文の目的語位置に繰り上がっていると考えられる。

この構文に関して指摘されうる特徴は、埋め込み文にはつなぎ動詞（連結

動詞) が現れないということである。

(16) *Considero Jorge ser honesto.

(17) *Julgo-me ser feliz.

つまり、この構文では、つなぎ動詞削除が義務的となっている⁴。

2. 2. 使役・知覚動詞+Nexus-object

主節に使役、知覚動詞がある場合、S→O Raising を伴う構文が起こりうる。

(18) Eu ouvi os meninos cantarem.

「私は少年たちが歌うのを聴いた」

(19) Paulo viu-as chorar.

「パウロは彼女たちが泣くのを見た」

(20) Mandei-os esperar no escritório.

「私は彼らを事務所で待たせた」

(21) Ela nos fez estudar.

「彼女は私たちに勉強させた」

(18) の埋め込み文の動詞は人称不定詞であるが、(19), (20), (21) の埋め込み文で、非人称不定詞を人称不定詞に換えると、文法性が劣る文となる。

(19') ?Paulo viu-as chorarem.

(20') ?Mandei-os esperarem no escritório.

(21') *Ela nos fez estudarmos.

つまり、埋め込み文の主語が繰り上がって目的格代名詞の形式となっている場合、埋め込み文の不定詞は人称変化しない。

さらに、時制を有する埋め込み文からの S→O Raising が生じているとみなされうる文も可能である。

(22) Ouça esta sonata como é triste.

「このソナタがどんなに悲しいか聴きなさい」

(22) では、esta sonata が、時制を持つ埋め込み文の主語位置から、主節の目的語位置に繰り上がっている。

3. 繰り上げの体系化

前章までで述べた、 $S \rightarrow S$ Raising と $S \rightarrow O$ Raising は、比較的多く扱われてきた文法現象である。しかしながら、繰り上げの可能性としては、母型文と埋め込み文の主語と目的語の位置の組み合わせとして考えると、 $O \rightarrow S$ Raising (Object-to-Subject Raising) や $O \rightarrow O$ Raising (Object-to-Object Raising) もありえる。

実際、 $O \rightarrow S$ Raising は、tough 構文に生じている現象である。

(23) O português é difícil de aprender.

「ポルトガル語は習得が困難である」

(24) Este livro foi escrito por um jornalista.

「この本は、あるジャーナリストによって書かれた」

(23) において、従属節の *aprender* の目的語位置から主節の主語位置に繰り上げが生じており、(24) では、*escrito (escrever)* の目的語位置から主語に繰り上がっているという解釈が可能である。

さらに、 $O \rightarrow O$ Raising も、(25), (26) において生じていると考えられる。

(25) Pedro tornou-se conhecido.

「ペドロは、知られるようになった」

(26) Maria se fez compreender.

「マリアは自分のことを理解させた」

(25), (26) において、再帰代名詞 *se* が、それぞれ、*conhecido (conhecer)*, *compreender* の目的語位置から、*tornou*, *fez* の目的語位置に繰り上がっているとみなしうる。

前章までで述べた $S \rightarrow S$ Raising と $S \rightarrow O$ Raising に、この $O \rightarrow S$ Raising と $O \rightarrow O$ Raising を加えると、Raising の型として考えられうる4つすべてを提示することができる。

学校文法、あるいは教育文法 (*gramática pedagógica*) として、学習者に基本文型から、派生文型の理解を促すときに、Raising を伴った構文をまとめた体系として提示することができる。

4. 結論にかえて

繰り上げとして、これまで詳細に扱われてきた S→S Raising と S→O Raising に加え、O→S Raising と O→O Raising というとらえ方ができる構文もあり、これら4つの型で Raising をとらえる可能性を指摘した。

ポルトガル語の教育的観点から、ポルトガル語とは言語差の大きい言語を母語とする学習者は、とりわけ、母語を通した（活用した）文法学習も効果が高いはずである。その場合に、本稿で示したような、構文のとらえ方を体系化して提示することが、構文理解に役立つと考えられる。

【注】

- ¹ 節（・文）が時制を有することと主語をもつことは、英語であれば必ず同時に起こり、節が時制を有すれば主語を有し、時制をもたなければ主語ももたない。しかし、ポルトガル語では、人称不定詞が存在しており、時制をもたなくとも人称をもつ節が観察される。
- ² 繰り上がった主語は、theme（あるいは、topic）で文頭に移動している話題化（topicalization）とみなす立場もある。しかし、文頭的主語とその後の文の間に休止（pause）がおかれるとは限らず、S→S Raising であるという解釈は否定されない。
- ³ Creio ser João inteligente.（あるいは、Creio João inteligente.）は認められる。
- ⁴ つなぎ動詞は、埋め込み文の主語位置から母型文の主語位置に繰り上がると同時に、削除されるという分析もできる。

【参考文献】

- 安藤貞雄 (1989): 『英語教師の文法研究』 大修館。
- 安藤貞雄 (2009): 『英語の文型—文型がわかれば、英語がわかる—』 開拓社。
- 坂東照啓 (1991): 「英語・ポルトガル語におけるいわゆる繰り上げについて」『ニダバ』 第20号, pp.90-99.
- Blake, Barry J. (1990): Relational Grammar. Routledge, London.
- Borba, Francisco da Silva. (1981): “A Regra de Alçamento em Português”, in Estudos

- de Filologia e Lingüística, T. A. Queiroz, São Paulo, pp.169-179.
- Borba, Francisco da Silva (Organizador). (1990): Dicionário gramatical de verbos do português contemporâneo do Brasil, UNESP, São Paulo.
- Castilho, Ataliba Teixeira de. (2010): Nova gramática do português brasileiro. Contexto, São Paulo.
- Cunha, Celso. & Luís F. Lindley Cintra. (1985): Nova Gramática do Português Contemporâneo. Nova Fronteira, Rio de Janeiro.
- Ferrarezi Junior, Celso e Iara Maria Teles. (2008): Gramática do brasileiro: uma nova forma de entender a nossa língua. Globo, São Paulo.
- Neves, Maria Helena de Moura. (2000): Gramática de usos do português. UNESP, São Paulo.
- 奥野忠徳. (1989): 『変形文法による英語の分析』現代の英語学シリーズ〈第9巻〉開拓社.